
巻頭言



「現代の大学生と大学教育」 Contemporary university students and the university education

青山学院大学理工学部
教授 秋光 純

大学生，特に理工系の大学生の質の低下が叫ばれてから久しい。やれ、「分数の計算が出来ない大学生」だの、「2次方程式を大学生に解かせてみたら50%を割っていた」だの、この種の話には事欠かない。これは会社にとっても決して他人事ではない。結局、これらの大学生は卒業すれば間違いなく会社員になるからである。

これらの事は2つの面から考えてみる必要があるように思われる。

- 1)まず第一に、本当に大学生の学力は低下しているのか。
- 2)もし本当だとすれば、その対策は？

という事である。

1)に関しては、「今頃の若者は・・・」ということはいつの時代でも言われてきた事である。実際、エジプトの碑文(!)にも「今頃の若者は働かなくなった」という苦情が書かれているとの事である。しかし、現在の事情は、単純に「老人の繰り言」では片付けられない事情が潜んでいるように思われる。

一番単純には、しばらく前までは、そんなに多くなかった大学への進学率が今や50%を超え、誰でも大学に行く時代になってみれば、必然的に全体のレベルは下がるという議論である。この議論に従うと、現在の大学のレベルに達しない学生が進学するようになった結果、「平均」として学生の質が下がった結果に過ぎないように思われる。果たしてそうであろうか。実際に多くの大学の教員と話してみると、学生の学力の低下を最も深刻に受け止めているのは、東大の先生であるように思われる。何かが変わっているのである。

ともかく、この数年の間、どの大学の先生も一様に言わ

れるのは「仕事(研究)に対する意欲がない」「言われた事しかやらない」という言葉である。

これらが事実かどうかは別として、確かに「大人」と「若者」との間に意識の差が生じていることは間違いない。この「意識の差」について、「大人(!)」の立場から若干整理してみる。

①まず第一に、多くの若者が人生の目標を失っているように見えることである。戦前までは、職業選択の自由はあるといってもやはり親の跡を継ぐケースが多く、多くの若者は自由がないのに苦しみながら、「自分が何に向いているのか、何になったらよいのかよくわからない」という悩みはなかった。しかし、現在は事情は全く異なる。多くの親は物分りが良く、自分の跡を継がせようとは思わないし、第一、サラリーマンでは跡を継ぎようもない。従って、多くの学生は高校の段階で選択を迫られ、「ちょっと理科が好きだから」という理由で物理学科に進学し、自分は物理学にあまり向いていないのではないかと悩む学生も多い。実際、新1年生に何になりたいかと聞いてみると、「自分は宇宙が好きだから、将来はアメリカのNASAに勤めたい」という学生が毎年20人以上いる。

これは、彼らが18才近くになっても自分の将来に関して現実感がなく、このような「夢のような将来像(彼らもなれないだろうことは百も承知である)」しか持ち得ないことを表している。これでは現実との落差に苦しむのは当然である。

②2番目に重要な問題点は、近年科学技術が急速に発達し、装置(あるいはおもちゃ)の中味が「ブラックボックス」になったことである。我々の小さい頃は、「鉱石ラジオ」を

作った理科少年が多かった。これはそんな昔の話ではない。ところが最近のコンピューターの発達が目覚しく、中味を完全に「ブラックボックス化」してしまった。我々は授業の時、「わからない事は覚えてしまわずに、根本から考えろ」と絶叫するが、このコンピューター社会では、「根本」から考えようがない。筆者はコンピューターが壊れた時、時々学生に直してもらすが、学生になぜ直ったのかを聞いてもわかったことがない（あるいは学生自身もなぜかはわからないことが多い）。そういう状況では、「まあ直ったんだからいいや」と、自分を納得させ、「根本から考えろ」といつも説教している自分に対して苦笑してしまう。これは、「学問に対する姿勢」としては、良い方向に働かないのは明らかである。

③3番目に問題なのは、大学の教育の内容と卒業した後の職業との落差である。

多くの学生に接してみるとわかるが、彼らの多くは、学問それ自身に興味があるのではなく、「単位」を取ることのみが主な関心事であることがわかる。彼らが聞いてくることは、「先生単位を下さい!」「何点とったら合格するんですか」ということばかりであり、彼らの大学に入った時からの目標が「なんとか4年で卒業する」ということであることがわかる（こんなことは言わずもがなのことであるが、こういう学生ばかりでないことはあたりまえのことである）。これは、親にも問題がある。多くの親は、子供が何を大学で学んだかはほとんど関心が無く、「大学卒業証書」を待ち望んでいる親がほとんどだからである。多くの親の願いは、何とか4年で卒業してくれという事である。

一方、会社の方も全く大学の教育を信用しておらず、大学で学んだことを真剣に面接で聞く試験官はほとんどいないであろう。

実際、スポーツ推薦で入学し、ほとんど授業には出席せず、一流会社に「堂々と」入ったと言うのはよく聞く話である。一方、大学は大学で、言訳が用意してある。「大学は専門学校ではなく、会社へ入るための職業訓練所ではない」というのである。

確かに、大学には大学として、広い意味での文化を守るという大変大切な役割がある。大学が、それ自身としては、すぐには役立たない「真理を探究する」という一番根本的な事を忘れ、目先の利益ばかりに追われたら大変なことになる。

確かに、大学は専門学校ではないのである。しかし、大学の方（叱られるかも知れないが、多くは文系の先生方）にも問題があるように思われる。今の「大学がレジャーランド化している」という現状は、学生が「こんなことはやってもやらなくとも将来の自分の生活とは関係無いんだ」ということの表明（従って間接的な批判）に他ならない（実際はそんなことは無いのだが、「若い学生諸君」に教養の価値をいくら説いても、とてもわかってもらえないだろう。「歴史」と同じように、人間は同じ「愚かさ」を永遠に繰り返しているのである）。

それならどうしたらよいだろう。まず会社側にお願いしたいことは、大学で何を学んだかを面接のときに、もっと真剣に聞いてほしいことである。筆者の個人的な経験によると、やはり、一つの問題に真剣に取り組んだ学生ほど、長い目で見ると視野も広く、従って、会社で活躍しているようである。

それでは大学の方では、現状をどう打開していけばよいのであろうか？今の学生の問題点ははっきりしている。それは、学生の多くが「精神的に大人になれない」ところにその原因があることは間違いない。なぜ大人になりきれないのか？それは彼らが判断を迫られる地位についていないことにその原因がある。例えば江戸時代には、多くの若者が20歳位で家督を継ぎ、全てのことを任せられ、世間の常識と勘案して自分で決断せざるを得なかった。これでは「大人」にならざるを得ない。現代はどうか。多くの大学生は22歳になるまで、教授の言うことを覚えるばかりで、そこで真剣に決断を迫られる状況は皆無に等しい。彼らの判断基準が「良い会社に就職する」という事であれば、それに対する判断はハッキリしている。判断に迷うことは無いのである。これではいくら「自主的に考えろ」「自分でやれ」と言われても、何をして良いかもわからない、というのが正直な感想である。

それではどうしたらよいのであろうか。筆者の経験によると、結論がわかっていない問題を出して考えさせる（あるいは実験させる）のが良いのではあるまいか。例えば、筆者の研究室では、「新しい超伝導探し」をやらせている。これは適当にその辺のものを混ぜれば運良く見つかるというようなものではない。一方、いくら勉強したからといって逆に見つかるものでもない。彼らはある意味で、毎日判断に迫られている。そのような過程を通して多くの学生は成長し、大人になるようである。実際、4年生の卒業研究を経て、修士課

程を真剣に取り組んだ学生の成長は目を見張るばかりである。これを大学1年生にやらせてみたらどうであろうかと言うのが筆者の考えである。つまり、1年生に「卒業研究」に類したテーマを真剣にやらせてみるのである。そうすれば、そういう研究を通して、なぜ「物理学の体系」を勉強しなければならないかもわかってくるのではあるまいか。これは一挙両得である。このようなアイデアは、半分「夢物語」であることを承知しているが、いつまでも点数ばかりを気にしている学生を大人にさせるにはこの方法しかないように思われるが、いかがなものだろうか。

